
1226

火瀬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1
2
2
6

【NZコード】

N3170A

【作者名】

火瀬

【あらすじ】

クリスマスの次の日、白いサンタが降りてくる…。

クリスマスは恋人と二人きりで。
誰しもが一度は夢見る事。

「クリスマスの次の日には出歩か無い方が良い」

と、三夜が言った。

相変わらず全身を暗い色の服で包み、周囲（今は僕の部屋の事だが）と溶け込むのを拒絶している。

僕は黙つて三夜の隣に腰掛けた。

「三夜、一応今日はクリスマスだろ？」

「そうだね」

「僕達カップルだろ？」

「一応ね」

「そこ一応いらない。」

「ふうん」

「……こんな時は今日は帰りたくないとか、家に来てとか、今夜家に誰も居ないのとか言つたりしないかなあ。」

三夜は少し考えて、

「帰りたくないけど家に誰も居ないの」と真顔で言った。

「クリスマスなのに……」

打ち拉がれる僕を見て、三夜は表情を緩めた。

「そんなに浮かれても居られない。クリスマスの次の日には、白いサンタが来てしまつから。」

「白いサンタ？」

三夜は決して電波な訳ではない。（ちょっと入ってるけど）

彼女は都市伝説の収集家だ。

ミニズバーガー や口裂け女みたいなメジャーな物から、誰も知らない様なマイナーな物まで、彼女の話は尽きる事が無い。「ある所に、若いカップルが居た。

彼らはとても仲が良かつたのだけれど、クリスマス前に大喧嘩をしてしまう。

彼はクリスマスに仲直りをする計画を立てた。」

窓が激しく揺れる。

今日はとても風が強い。

「クリスマスの日、彼は友達からサンタクロースの衣裳を借りて彼女に合いに行つた。
彼が彼女の家のドアを開けると、彼女は見知らぬ男と裸で抱き合つていた。

彼女と男は、彼を笑つた。

彼はそのまま何も言わずに、その場にあつた包丁で一人を刺した。

一際風が強く吹き、ぶつんという音を立てて電気が消えた。電線が切れたのかな、と僕が言った。

そうだと思う、と三夜が言った。

僕は非常用の蠟燭に火を灯し、続きを促した。

「彼は一人を山の中に捨てた。返り血の付いた衣装は男に着せて、包丁も近くに捨てた。

彼が立ち去った後、男は意識を取り戻した。

男は隣で彼女が冷たくなっているのを確認して、彼の後を追つた。

途中で雪が降り、車の跡を消してしまっても、男は正確に後を追つた。

男が彼に追い付いたのは、日付が変わった頃の事だった。

男はにつこりと笑つて、

「メリークリスマス」

と呟いた。

男は彼を刺して殺した。」「男もそのまま死んでしまった。サンタクロースの衣装には雪が降り積もつて、真っ白になっていた。」

風は止み、

窓の外を見ると、静かに白が舞つていた。

次の日 すなわち、今。

僕は外を歩いている。

三夜が熱を出したので、様子を見に行くためだ。

昨日の話は確かに面白かったけど、生憎僕は迷信を信じない。白いサンタに襲われる事は万一千にもない。

ちんけな怪談じゃあるまいし。

三夜の家のドアを開けると、そこには。

裸で抱き合つ、男と女。
頭の何処かで誰かが言つた。

「メリークリスマス」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3170a/>

1226

2011年1月21日02時32分発行